

寅さん歩 その 14

東京に こんなところ-21

平野 武宏



首都東京は「徳川幕府の江戸から明治維新へ、そして関東大震災・太平洋戦争の被災で壊滅から復興、1964 年（昭和 39 年）の東京オリンピックによる街並み・交通網の再整備」と時代と共にその姿を変えています。そして 2020 年の東京オリンピック・パラリンピック開催に向けて、更に近代的な姿に生まれ変わろうとしています。6 年前に移住して「寅さん歩」で東京を歩き回っている寅次郎は「東京に こんなところもあるのだ！」と思わせる場所に出会い、感動し、シリーズとして取り上げ、紹介しています。連日の猛暑や熱帯夜が続きます。「ためらわずに冷房を！」は今年聞く言葉です。江戸の怖い話の舞台を紹介して、涼んで、いただくという緊急特別企画です。

～ 江戸の怖い話 ～

〔四谷怪談〕 舞台:新宿区左門町 17、中央区新川 2-25-13

「四谷怪談」は落語や歌舞伎・映画で演じられる「お岩さん」の怪談話と寅次郎、理解してきましたが、自分の足で四谷左門町(田宮家の跡地)の於岩(おいわ)稲荷田宮神社に行き、神社に置いてある説明文を読み、この説を信じることにしました。

1. 貞享年間(1684 年～1688 年)四谷左門町で暮らしていた田宮伊右衛門と妻のお岩は人も羨む仲のいい夫婦でした。年の俸給は 16 石足らずで、台所はいつも火の車、お岩は商家に奉公に出て家計を支えました。日頃から家の庭にある「屋敷社」を信仰したお蔭で田宮家は貯えも出来、かつての盛んな時代に戻ることが出来ました。信仰のおかげで田宮家が復活したと言う噂はたちまち評判になり、近所の人々は幸運にあやかろうとして「屋敷社」を「お岩稲荷」と呼んで信仰、田宮家も「屋敷社」の傍らに小さな祠を作り、「お岩稲荷」と名付けました。家内安全、無病息災、商売繁盛、開運、悪事や災難除けの神と呼ばれ、江戸の人気を集め、毎日のように参拝の人であふれるようになりました。お岩という女性に怨霊のかけらもありません。写真下は田宮家住居として管理され、昭和 6 年(1931 年) 田宮

稲荷神社跡地として東京都の指定史跡とされました。戦災で焼失、昭和 27 年(1952 年) 於岩田宮稲荷神社が再建しました。



2. **歌舞伎作者 鶴屋南北**はかねてから

「於岩稲荷」のことを聞いていました。

お岩という女性が死んで 200 年も経っています。

今でも江戸で人気ある「お岩」の名を使って歌舞伎にすれば大当たり間違いないと台本書きに入りました。お岩は善人では面白くないと、江戸で評判になった多くの事件を組み込み、**お岩怨霊劇**を作りました。舞台名は「四谷」では露骨すぎると「**東海道四谷怪談**」とし、文政 8 年(1825 年)江戸中村座で初演されました。

3. はたせるかな**歌舞伎は大当たり**、江戸中の話題をさらいました。

あまりの人気ぶりに当惑した幕府は四谷塩町の名主に命じて町内の様子や出来事をまとめて奉行に提出させています。

提出されたのは歌舞伎の初演から 2 年後のことです。

その内容とは「貞享年間(1684 年～1688 年)四谷左門町に田宮伊右衛門(31 歳)と妻のお岩(21 歳)が住んでいて、伊右衛門は婿養子の身でありながら、上役の娘と重婚して子をもうけてしまいました。そのことを知ったお岩は発狂した後に失踪。

その後、お岩の祟りにより、伊右衛門の関係者 18 名が次々に非業の死を遂げていき、田宮家は滅亡。歌舞伎ではお岩が毒薬のため顔半分が醜く腫れ上がったまま、髪を梳き悶え死ぬところ、伊右衛門がおびただしい鼠と怨霊に苦しめられるところなどが有名な場面となっています。元禄期に田宮家の跡地に引っ越してきた人物にも奇怪な事件が起きたので、自らの菩提寺の妙行寺に稲荷を勧進して追善供養を行った所、怪異がやんだと

言われている」とのことです。

於岩田宮稲荷神社と道を挟んで「於岩稲荷 長照山 陽運寺」(写真下)があります。

寺内の説明板には「この地にあったお岩の霊堂は戦災に遭ったため栃木県沼和田から薬師堂を移築再建した。境内の泰山木の下にお岩様ゆかりの祠があったと伝えられ陽運寺の起源とされています」こちらの方が賑やかな感じでした。



4. この歌舞伎の影響力は大きく、最初は出演した役者は四谷左門町の於岩稲荷神社参拝していました。そのうち、上演前にお参りしないと役者が病気になったり、事故が起きるとの話にまで発展しました。
5. 明治に入り、お岩を演じては天下一品といわれた市川左団次から「四谷まで時間をかけて毎度行くには遠すぎる。ぜひとも新富座などの芝居小屋のそばに移転して欲しい」との要望もあり、明治12年(1879年)火事で社殿が焼失したのを機に隅田川の畔にあった田宮家の敷地内に移転しました。それが現在の中央区新川にある田宮於岩稲荷神社です。(四谷では於岩田宮稲荷神社と稲荷神社の名が違うのはなぜか不明)(写真下)
境内の説明板には「敷地は市川左団次の所有地ともいわれる」と書かれていました。戦災で焼失しましたが、戦後、四谷とともにども再建されました。



6. お岩と田宮家代々のお墓は四谷から巣鴨に移った妙行寺にあります（写真右）正面はお岩さんのお墓です。

NO.190 寅さん歩 その13 お江戸の閻魔大王-8（谷中～板橋）「こぼれ話」を参照願います。



〔番町皿屋敷〕 舞台:千代田区五番町・九段南4丁目

牛込御門内五番町にかけて「吉田御殿」と呼ばれる屋敷があり、これが赤坂に移転して空き地になった跡に二代将軍 徳川秀忠の娘千姫の御殿が建てられました。それも空き地になった後、その一角に火付け盗賊改 青山播磨守主膳の屋敷が建ちました。ここに奉公していた「お菊」という下女が承応2年（1653年）正月二日、主膳が大事にしていた皿十枚のうち一枚を割ってしまいました。怒った奥方はお菊を責めますが、主膳は手ぬるいと皿一枚の代わりにお菊の中指を切り落とし、手打ちにすると一室に監禁しました。お菊は縄付きのまま部屋を抜け出して、ほどけた帯を引きずりながら逃げて、裏の井戸に身を投げました。写真右は現在の市ヶ谷駅に向かう「帯坂」です。説明文には「お菊が髪を振り乱し、帯を引きずって逃げた所」と記載。夜毎に井戸の底から「一枚、二枚・・・」と皿を数える女の声が屋敷中に響き渡り、身の毛もよだつ恐怖しさでした。やがて奥方が生んだ子供には右の中指が無く、やがて、この事件は公儀の耳にも入り、主膳は所領を没収されました。公儀は小石川伝通院の了誉上人に鎮魂の読経を依頼しました。ある夜、上人が読経をしているところに皿を数える声「八枚、九枚」、そこで透かさず上人は「十」と付け加えると、お菊の亡霊は「あらうれしや」と言って消え失せたといひます。



この話は江戸時代に歌舞伎、浄瑠璃、講談の題材になり、明治には数々の手によって怪談として発展し、映画化もされています。また、この話は姫路城に戦国時代に伝わる話で、播州皿屋敷を江

戸時代にしゃれっ気で播州を番町に置き換えた作り話のようです。
青山播磨守主膳という火付け盗賊改も存在していないとのこと。
寅次郎、「四谷怪談」も「番町皿屋敷」も興業の営業成績を意識
して作られた台本だと理解しました。

〔江戸城の呪われた井戸〕 舞台:千代田区 1-1



皇居東御苑の天守台の説明板には「徳川家康が入城以来、江戸城では3度の天守が築かれ、寛永度(1638年)の天守は地上から約58mあったといわれています。(写真上右は説明板から撮影)

この天守は明暦の大火(1657年)で焼失、天守の再建は不要とされ、現在に至っています。天守のあったのは50年間でした」と記載。
2020年東京オリンピック・パラリンピックを契機に再建運動が行われています。

1. 天守なき天守台から死体が

文政期(1818年~1830年)のこと、御末と呼ばれる役職(大奥の下級女中)の「あらし」という名の娘が行方不明になりました。ところが夜になっても、翌日になっても帰ってこないで表の男性たちも動員して、大奥内を探しました。25か所ある井戸や天井裏を探しましたが、どこにも見つかりません。3日たった夜のこと天守台の見張りの者が頭上から謎の声を耳にしました。

「あらしはここに、ここに・・・」そう聞こえたので見張りが見上げると、頭上から大きなモノが投げ落とされました。下に行ってみると、それはなんと失踪した「あらし」の死体だったのです。しかも何かにかきむしられたように、全身傷だらけの血まみれでした。

2. 身投げに誘う呪われた井戸

大奥の維持に井戸に身投げする奥女中が絶えないことから、文政期（1818 年～1829 年）暮れ六つ（午後 6 時ごろ）に井戸に蓋をして錠をかけることになりました。ある日、老女飛鳥井に仕えていた部屋方の女中の姿が見えないことから探し回ったところ、深夜になって屋外で叫ぶ声が聞こえ、中奥に務める男の役人らが探したところ、錠をかけたはずの井戸の中で発見、救出されました。女中の言うには、小袖を着た女が井戸の後ろで物言いたげに立っていたので、近づいたところ、落ちたと言います。その井戸には 12 名が飛び込み自殺をしたそうです。

写真下左は皇居東御苑の大奥跡、写真右は天守台前の井戸



3. 二の丸庭園の井戸

皇居東御苑の二の丸庭園にある二の丸雑木林は昭和天皇のご発意により、都市近郊で失われていく雑木林を復元しようと昭和 58 年（1983 年）から 3 年をかけて造成されました。

また、天皇陛下のお考えを受け、平成 14 年（2002 年）に拡張されたのが新雑木林です。流れもつくられました。

新雑木林に神秘的な井戸があります。この井戸は水が絶えず湧き出て庭園の中の池へと流れていますが、近くに行くと水が白く濁って見えます。水は透明なので冷気を感じさせます。

最初に行った時の写真がボケていて、靈気の影響かと思いましたが、二回目の写真は上手に撮れていましたので、単なるブレによるものと判明しました。



「番町皿屋敷」と「江戸城の呪われた井戸」は東京都W Aの例会資料を引用しました。

この他に大手町のビルの谷間に移設しようとして祟りが起きたと動かせない「将門の首塚」があります。

詳しくは「寅さん歩 その10 健康ご利益めぐり-20 千代田区」の「こぼれ話」を参照ください。

【こぼれ話】 高野山の肝試し 舞台：和歌山県高野山奥の院

56年前の学生時代に高野山の宿坊に泊まり、合宿したことがありました。練習に疲れた中日の夜に1年生が集められて、先輩から番町皿屋敷の話を聞きました。その後1年生に肝試し（奥の院まで行き、お墓の写真の数を数えてくる）が課せられました。

一人ずつ、時間差で高野山の参道を奥の院を目指します。途中には2年生が隠れていて、出てきて脅かします。怖さを隠すため大声で歌を歌って歩いた記憶があります。奥の院にある写真フィルムの先駆者の墓に写真が何枚貼ってあるのか数えます。数え終わる頃に、墓の裏から先輩が「なんまいだ〜」と出て来ました。

貴重な体験でしたが、肝試しの効果は2年生になり、脅かし役で、人魂らしきものを見ながら、じっと隠れている方が怖かったです。1年生が来るとホッとしました。

でも、もっと怖い思いをしたのは、コースの左折を間違っ直進して、何時までも帰らない同僚です。皆で探し、見つけた時の言葉は「いつまでたっても、何も出てこなく、怖かった」が印象に残っています。



少しは涼しくなりましたか？

涼しくならない方は部屋を暗くして、深夜に再度お読みください。

次回は 東京の学食めぐり-27 です。

平野 寅次郎 拝